

平成15年度学力向上フロンティアスクール中間報告書

学校の概要(平成15年4月現在)

都道府県名	鳥取県
-------	-----

学校名	米子市立住吉小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊 学級	計	教職員
学級数	5	5	4	4	4	4	2	28	44
児童数	131	132	151	150	145	155	9	873	

研究の概要

1. 研究主題

確かな学力を育む指導方法の工夫改善 ~一人一人の学びを大切にした授業づくり~

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

1年～6年、特殊学級 算数

- ・これからの社会を人権感覚豊かに、主体的・創造的に生きる力を養うためには、思考力・判断力・表現力・既習の知識・技能及びそれらを活用する力が必要であり、それらの力の育成は、算数科の目標と密接なかかわりをもっているため。
- ・児童の実態から、算数の学力を向上させる必要があると考えたため。
- ・子ども自ら学びとっていく力を高めるためには、内容の系統性が明確な算数の学習が有効であると考えたため。

(2) 年次ごとの計画

テーマ
確かな学力を育む指導方法の工夫改善 ~一人一人の学びを大切にした授業づくり~ 平 仮説 成 (1)研究の仮説 15 基礎学力の「知識・技能の基礎・基本」「学び方の基礎・基本」「人間としての基礎・基本」の3つの中の、「知識・技能の基礎・基本(各教科・領域において身に付けるべき知識・技能)」と「学び方の基礎・基本(自ら問題を発見し、自らの考え方や方法で問題を解決していく能力)」に焦点を当てて取り組むことで、人権感覚を根底で支える確実な学力がより確実なものになるであろう。 研究の内容・方法 一人一人のよさを生かした、確かな学級経営を基盤として、算数科を中

心に、児童の実態に即したきめ細かな指導により、確かな学力の向上をめざし、次の点について実践研究を進め、児童の主体的な学びや学力の保障、教師個々の指導力の向上を図る。

確かな学力の向上を図るための研究体制の確立と職員研修の充実

- ア 学力向上についての共通理解と研究体制や具体的な施策の樹立
- イ 授業実践研究を通しての教科の特質をとらえた指導方法の確立
- ウ 個々の指導力を高める研修の充実

指導法の工夫改善と教材開発

「楽しく・分かる・できる授業づくり」をめざして

- ア 問題解決・体験的な活動を重視した主体的な学びの力の育成
- イ 指導法の工夫 ウ 教材開発

エ 学習状況の評価の工夫改善 オ 基礎・基本の定着への手立て

学習習慣の確立と家庭連携

ア一人学びの時間確保 イ宿題学習の充実 ウ読書活動の推進

エ 児童の生活・学習実態のきめ細かな情報交換

平成16年度	<p>テーマ</p> <p>確かな学力を育む指導法の工夫改善 ～一人一人の学びを大切にしたい授業づくり～</p> <p>研究の見通し</p> <p>仮説</p> <p>仮説1．既習事項を活用し、操作活動や体験的活動での自力解決、友だちとの比較相互学習、一斉学習等で問題解決学習を進めれば学び方がわかり、確かな学力の向上につながるであろう。</p> <p>仮説2．少人数指導・TTによる、個に応じた指導方法を工夫・改善し、きめ細かな指導・支援をしていけば、児童の確かな学力は向上するであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成15年度の内容をさらに修正しながら実践を深化する。 ・平成15年度のデータの分析とまとめ <p>一人一人のよさを生かした、確かな学級経営を基盤として、算数科を中心に、児童の実態に即したきめ細かな指導により、確かな学力の向上をめざし、次の点について実践研究を進め、児童の主体的な学びや学力の保障、教師個々の指導力の向上を図る。</p> <p>指導法の工夫改善と教材開発 評価と支援活動の工夫改善</p> <p>学習習慣の確立と家庭連携</p>
--------	---

平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

多様な算数的活動 算数的な活動をどうとらえるか、単元ごと、1時間ごとに算数的活動をどう取り入れていくかをどう考えていくかを心がけた。具体物を使って思考する活動だけでなく、式を読む、自分が考えたことを絵や図で表すこと、説明することも算数的活動ととらえ、授業の中で意識して取り入れることができた。

生き生きした表現力 授業の中で自分の考えを表現するように支援した。友達の考え方に新しい発見をしたりすることによって、自分の考えに付け加えたり、友達の考え方に新しい発見をしたりすることによって、自分の思考を広げ、表現力を豊かにすることができた。それは、算数に対する自信となり、次への意欲へつなげることができた。

個に応じた支援のあり方 数学的な考え方の広がり、算数的な表現力の広がり、教師が授業の中で意識して取り入れる必要があった。また、子ども達同士の話し合いや、教え合いによって個に応じた支援をすることもできた。

個に応じた支援のあり方 授業を組み立てる中で子ども達同士の話し合いや、教え合いによってより個に応じた支援をすることができた。

単元に応じて、授業の半分を使って少人数指導を取り入れることで、よりきめ細かな指導をすることができた。

毎時間、ノートに「めあて」、「もんだい」、「考え方」を書くことにより、自分なりに考えて解こうとする意欲が出てきた。友達の考えを聞いて付け加えたり、「まとめ」に分かったことを書いたり、自己評価をしたりなどもできつつある。

少人数指導のため、一人一人の考えを述べやすい雰囲気があり、時間的にもみんなが意見を言うゆとりもあるので、ふだん発言に対して消極的な児童も進んで発表することができた。いろいろな考え方を発表し合うことで、より良いものへ練り上げていくこともできた。

効果的な指導についての情報交換や研修ができ、指導方法や児童に対する接し方、評価の仕方等について、教師自身の視野が広がった。

小集団で学習することにより、学び合いの時間ができ主体的な学びができるようになった。

少人数指導においては単元によってコース別学習や習熟の程度に応じた指導ができるなどさまざまな指導の工夫が可能となり効果が上がった。

学習の目標や内容、児童の実態等を考慮し、単元全体、一単位時間のどの段階で一斉指導を行い、どの段階で少人数による個別指導やグループへの

